

2007、12、10

世界が尊敬した日本人(31)

『世界のミフネ』となった国際スター・三船敏郎

前坂 俊之(静岡県立大学国際関係学部教授)

世界で最も有名な日本人映画監督は黒澤明だが、黒澤とコンビの三船敏郎への評価が日本ではあまり高くないのが不思議である。

『渡辺謙』ら国際的に活躍する俳優がまだまだ少ない中で、これまでダントツの国際スターが『世界のミフネ』だったが、没後10年たった現在でもまともな研究書1冊さえ出していない。

三船は関東軍航空隊などで反抗的な上等兵として8年間過ごし、終戦を解放感いっぱい
で迎えた。昭和21年(1946)6月、26歳で食いつぶれた日雇い作業員から東宝の第一
回ニューフェイスに応募、一旦、不合格となったのを黒澤に救われ入社した。

三作目で黒澤映画「酔いどれ天使」(1948年)に初出演し、日本人離れした見事な体軀
と『野獣』のような迫力とスピードでスクリーンからギラギラとした強烈な男性的魅力を発散し
て、一躍スターの座に着いた。



※実際の商品イメージとは異なります。

以後、『野良犬』(1949年)の成功で、黒澤、三船のコンビが定着する。昭和26年(1951)のベニス映画祭で『羅生門』がグランプリに輝いた。日本では興行的にも散々で評価されなかったこの作品が日本映画では初の国際賞を受賞したことに映画関係者は驚いた。

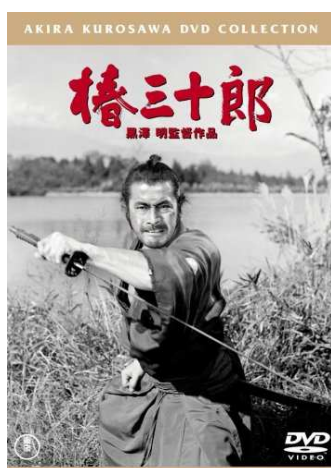
それ以上に、敗戦以来、打ちひしがれていた日本人全体に大きな感動と希望と勇気を与えた。強力コンビの誕生が日本映画の黄金時代を築くと同時に、「世界のクロサワ、ミフネ」として世界の映画界をも席卷する。

「黒澤なくして三船なく、三船なくして黒澤なし」—切っても切れない2人は『醜聞』(50)『羅生門』(50)『七人の侍』(54)『生きものの記録』(55)『蜘蛛巣城』(57)『隠し砦の三悪人』(58)、『用心棒』(61)『椿三十郎』(62)『天国と地獄』(63)『赤ひげ』(65)など次々に映画史上に残る傑作を生み出し、三船は『生きる』(52)以外は黒澤と決裂する『赤ひげ』までの

全作品に出演した。

サムライを演じる三船のダイナミックでスピード感あふれた演技は国際標準を超えた圧倒的な迫力で、黒澤の映像美に強烈なキャラクターを造形した。西欧人が憧憬するサムライ、ジャパニーズのエキゾチックさ、オリエンタリズム、セックスアピールがミフネにあり、黒沢、三船は海外に熱狂的な信奉者を生んだのである。

当然のこととして、2 人の国際映画賞の受賞は群を抜いて多い。『羅生門』に次いで「七人の侍」でもベニス映画祭銀獅子賞、米アカデミー賞外国語映画賞、「赤ひげ」ではベニス主演男優賞など世界の映画賞を総なめにした。



黒澤作品以外でも、三船は稲垣浩監督「宮本武蔵」(54) 米アカデミー賞外国語映画賞、同「無法松の一生」(58) ベニス映画祭金獅子賞、メキシコ映画「価値ある男」(61) でもゴールデングローブ賞外国語映画賞を受賞するなど、「ミスター・ミフネ」「サムライ・ミフネ」として、海外からの出演依頼が引きもきらず、ファンレターも箱いっぱい届いたという。

昭和 37 年(62)には、三船プロを設立して独立、海外作品にも出演して、国際的にも活躍した。巨匠ジョン・フランケンハイマー監督『グラン・プリ』(67)では、イブ・モンタンと、米映画「太平洋の地獄」(68)ではリー・マービン 仏映画「レッド・サン」(71)ではアラン・ドロンの、米「ミッドウェイ」(76)ではチャールトン・ヘストン、ヘンリー・フォンダら世界の名優と数多く競演、友人付き合いをした。亡くなる直前まで日本が生んだ空前絶後の国際スターとして海外出演を続けていた。

黒澤への高評価は海外と日本との差はないが、三船の方は国内では演技が大味で、地そのものだとして低評価である。しかし、それまでの時代劇の様式美を超えた彼の独創的な殺陣は黒沢の演出力のたまもの以上に、三船の抜群の運動能力、演技力なくては不可能であった。

リメイクや盗作騒ぎとなった「荒野の 7 人」「荒野の用心棒」などでの、クリント・イーストウッドらハリウッドスターの演技力と比べると三船の一段のすごさがよくさがわかる。

黒澤を師とするジョージ・ルーカス監督の「スター・ウォーズ」(77) から、ダース・ベイダー役の出演依頼があったのを三船は断っていた。もし、引き受けておれば、「ミフネ」の名声は一層世界的になっていたことは間違いない。平成 9 年(1997)12 月、死去。享年 77。

